

2021 年度 事業報告

施設名 東北沢つどいの家

1 利用状況

事業種別： 生活介護 定員 7人 利用者数 11人

(1) 障害支援区分

区分6	10人	区分5	1人	区分4	0人	区分3以下	0人
計	11人						

(2) 障害の程度

		身体障害者手帳				計
		1級	2級	3~7級	なし	
愛の手帳	1度					0人
	2度	3人				3人
	3~4度					0人
	なし	7人	1人			8人
計		10人	1人	0人	0人	11人

(3) 年齢、性別

10代以下	0人	40代	2人
20代	4人	50代	1人
30代	2人	60代以上	2人
計		11人	

男性	6人
女性	5人
計	11人

2 事業実施状況

(1) 活動・支援の内容

- ・開所日数 245 日で延べ利用者 1545 人、一日平均 6.3 人の利用で、平均利用率 90.1%だった。利用者や家族が新型コロナウイルスに罹患したり通所自粛したりしたことなどもあって、2020 年度と比べ一日平均の利用者数が 0.1 人下がり、年間の利用率も 1.7%下がった。
- ・コロナ禍ではあったが、事業所内の感染対策のみならず利用者各家庭での協力のおかげもあって、罹患した利用者は出たものの、施設内での感染拡大や濃厚接触者の認定にはつながらず、事業を継続することができた。そうした状況で、精神的に不安定な状況を抱えている利用者が昨年度よりも多く、個別面談などでこれまで以上に気持ちの部分に注視するような支援が必要だった。
- ・訪問支援を行ってきた 2 名の利用者に対しては、感染予防もあり今年度も訪問による支援を控えていた。そのうち 1 名に書類の確認が必要で家庭訪問をした際に保護者の異変が見受けられ、相談支援事業所や区のケースワーカーと連携をとって対応したが、結果的には家庭内の介護バランスが崩れるのは防げなかった。
 - ・利用の自粛を続けてきた高齢施設を併用している利用者が、コロナ禍の先が見通せない状況もあり利用再開の目途が経たないために退所することになった。
 - ・ボランティアの協力が必要なイベントは、感染防止の観点から全て中止とした。

※行事等

- ・4月
- ・5月
- ・6月 自衛消防訓練 (29日)
- ・7月 つどいのわ発送 (26・27日)

- ・8月 暑気払い (5日)
- ・9月
- ・10月 大学ボランティアサークルとの交流会 (27日)
インフルエンザ予防接種 (16日)
- ・11月 障害者アート展出展 ※見学は中止
- ・12月 大学ボランティアサークルとの交流会 (14日)
- ・1月 年賀状書き (10、15日)、忘年会 (28日)
- ・2月 冬休み (~3日)、新年会 (15日)
両つどい周年記念式典 (22日)
- ・3月 自衛消防訓練 (24日)、納会 (30日)

※一日のスケジュール

8:45	職員ミーティング
9:45	来所時間
10:00	朝の準備・朝のミーティング
10:15	午前の活動
11:30	昼食・昼休み
14:00	午後の活動
15:15	帰りのミーティング・帰り支度
15:50	退所時間
16:20	職員会議 ほか

※日中活動内容

・ グルメ	コロナ禍の感染予防の一環として、「調理場面での感染リスク」を減らすために、職員が担当の日を無くし、利用者考案のメニューのみを感染対策徹底したなかで12月まで実施した。1月からは感染拡大の状況を受けて活動を中止した。職員の入替りもあり、作業方法を自ら介助者に伝える良い機会となった。
・ グルメ振り返り	グルメで使用した食材などの知識や生活の中で必要な食にまつわることを共有できるように、グルメ活動を行った日の午後に振り返った。 1月以降のグルメ活動の中止に伴い、振り返りの活動も中止となった。
・ セルフ	自分の時間の使い方やスケジュール管理を経験することを趣旨として行っている活動で、自分のペースで予定を組みながら、グルメのメニュー作成、発行紙の文章作成、レザークラフトの作業の補填、その他個別の取り組みなどを行った。コロナ禍で実施できない活動もあり、セルフに振り替えたこともあって、昨年よりも回数が増えたが、その分、利用者も活動内容を考えるのに戸惑っている姿も見られたものの、個別に話を聞くなどの不安に対して寄り添う支援も行った。
・ ミーティング	「自分の考えた事をしっかりと伝える」場面としての役割を担っている活動。虐待がテーマに上がった時には、「自分が虐待に気が付いているか?」「これって虐待なのか?」など、利用者が意見をしっかりと出しながら、それぞれ自認していくような話し合いもなされた。
・ レザークラフト+α	地域のイベントなどが中止や規模縮小となってしまう、自主生産品を販売する機会が今年度も少なく、利用者の販売会への参加も難しい状況が続いたため、制作作業に対するモチベーションを保つことが難しかったが、下半期になるとつどいの家の周年行事の記念品にレザークラフトを配ることが決まったために、目標をはっきりとして作業への意欲につながっていた。
・ 美術表現	主に季節を感じられるものをモチーフにしたが、実態のあるものだけでなく、制作者のイメージを掻き立てるようなテーマ、例えば『台風』や『年神様』なども設定して絵を描いてもらった。なるべく実物をじっくり見ながら、色の三原色を基本に不透明水彩等の絵の具を使って絵画を制作した。

<ul style="list-style-type: none"> サークル 	<p>考える力をつける文科系と、楽しみながら身体を動かす体育系で活動を行った。雑学クイズが好評で「今度はこれをテーマにやってほしい」とリクエストが上がるようになった。体育系の活動では、みんなが楽しめるようにルール等を工夫して主体的に参加できるよう支援した事で、利用者の理解力や思考を発見する機会にもなった。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 訓練 (PT) 	<p>隔週でPTの専門的指導を受けながら利用者へのリハビリを行ったが、感染状況等の影響もあり計画よりも実施回数が減ってしまった。活動後の振り返りを職員全員で行ない、利用者個々の状況を伝えながら、今後予想される問題や生活環境の変化を共有して対応できるように話した。</p>
<ul style="list-style-type: none"> けんこう 	<p>身体の事や日常生活に関する情報をクイズや話し合いを絡めながら共有した。昨年度に続いて新型コロナウイルスの話題も多かったが、事業所や個人でできる感染対策について話し合うようにし、「誰かにやってもらうこと」ではなく「自分でやること」として個人が対策できるように理解を深めていけるように取り組んだ。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 美化 	<p>普段使っている場所をきれいにすることを目的として「訓練室」「倉庫」「トイレ」を中心に数名ずつ担当となり、掃除機をかけたりマットを拭いたり洗面台を磨いたりした。それぞれが雑巾やブラシを握り易いように工夫しながら作業をした事で、単なる清掃活動ではなく意識的に身体を動かす機会にもなった。</p>
<ul style="list-style-type: none"> カラオケ 	<p>12月までは感染症対策を充分に行いながら、心肺機能の維持を楽しく行うことを目的に利用者から希望する曲を選んでもらい、声を出して唄った。積極的に参加する利用者が多かったが、感染拡大を受けて1月からは歌は唄わずに、好きな映像を観てリラックスするスタイルにした。</p>

(2) 地域交流

- 40周年の積み重ねを地域の方にPRしつつ、地域との関係性を意識した活動を目指していたが、コロナ禍の感染状況もあり積極的な地域交流は行えなかった。
- 社会資源として地域団体等が主催する行事への参加を計画したが、イベントの中止などもあり実施は難しかった。ただ、ぽーとたまがわの提案と協力を得て、事業所の宣伝を兼ねて玉川地域で行われた福祉イベント（玉川福祉フェスティバル）に参加することができた。

(3) 家族、関係機関との連携等

- 例年開催している保護者会を中止にせざるを得なかったが、連絡事項の確認など理由を見つけては電話連絡をしたり、遅刻などで保護者が送迎したりする場合など、直接話をする機会を大事にして、これまで以上に丁寧なコミュニケーションを心掛けた。
- 家族や利用者本人の罹患があり、施設内での感染拡大などへの不安から利用を自粛する方もいたが、保護者には状況を細かく報告しながら休みの間も電話をするなど、利用者や保護者への負担軽減に努めた。
- コロナ禍で個々の抱えるストレスが昨年度よりも増大しているように感じ、ご本人やご家庭の意向をじっくりと聞くように心掛けた。

(4) ボランティアや実習生の受入れ

- 外出などが難しく、限定された人間関係のなかで生活する利用者の視野を狭くしないために、WEBを利用して大学のボランティアサークルやボランティア協会との交流会を行った。ただ、実際に会って話をするのとは大きく違い、次につながる関係性を構築していくのには、色々と課題があると感じた。

(5) 危機管理

- ・ 新型コロナウイルス拡大への感染防止を最優先に位置づけて事業をおこなってはきたが、結果として利用者2名が罹患してしまった。嘱託医や家庭との連携はスムーズにとれ、濃厚接触者もなく、感染拡大につながることはなかった。状況的には事業所が起因したものではないと思えるが、発症前後の状況を報告していくなかで感染対策の徹底を職員はじめ利用者各家庭と再度確認する機会とすることができた。
- ・ 職員の入替りもあり、災害時の支援者側の動き方を確認する訓練を2回実施した。また、災害用の備蓄物品の期限チェックと入れ替えも行った。

(6) 職員研修の実施

- ・ リモートで参加が可能な研修が増えてきたこともあり、これまで参加の少なかった外部の研修へも積極的に参加してスキルを身につけることができた。

(7) その他（苦情・事故等）

- ・ ヒヤリハット（計20件 給食発注ミス、服薬の確認ミス ほか）
OJTの一環として記載するようになってきてはいるが積極的・自発的な記載はまだ少なく、事象の基準や認識に個人差が大きい。
- ・ 所内での事故（計5件 送迎車両の故障、服薬の忘れ、施錠忘れ ほか）
軽微な事故を見逃さずに報告した結果だと捉えている。報告を共有する事で重大事故に繋がらないように努めた。
- ・ 区への事故報告（計3件 新型コロナウイルス罹患 ほか）
利用者と家族の罹患 2件、家族が罹患し利用者が濃厚接触者となり利用停止 1件

3 重点課題と取り組み・成果

2021年度は以下を重点課題として挙げ、取り組んだ。

① 40周年を記念する企画の実施

- 今後のつどいの家の事業を考えていくような企画を検討したが、地域を巻き込んでの記念行事の開催は行えなかった。玉堤の30周年と併せて記念の交流会を行った。ここ数年で職員も入替っており、事業の成り立ちを振り返り、今後のつどいの家に向けて考えていく良い機会となった。

② コロナ禍における支援の見直し

- コロナ禍で利用者が抱えるストレスに対し、精神的なフォローを重視して支援を行うとともに、保護者に対しても、電話などでの丁寧な対応を課題として挙げていた。そうした中で、利用者のみならず家族にも安心して利用していただけるように、個人情報に最大限配慮しながら当事業所に関係ある感染に関する情報を発信した。罹患した本人や家族などに対しても施設の状況を伝えるなど「自分が誰かにうつしていないか」という不安を取り除いてもらえるように気を配った。

③ 個別ニーズへの対応

- 感染拡大のなか様々な場面で抑制された生活を続けている状況のため、ストレスを溜め込んでいる利用者も多く、個別に話を聞いたり、いつも以上に丁寧な説明をしたり、新型コロナウイルスに関係のない場面でも不安やストレスを増やさないように心掛けて支援した。